

月刊

# みんぱく

◎ 国立民族学博物館

2010

I

月号

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283  
平成22年1月1日発行 第34巻第1号通巻第388号

特集◎ **トラ**



# 日本の食を訪ねて

くぼ しゅう  
久保 修

## 昔

から取材旅行にでかけるたび、その土地の市場へは時間の許すかぎりなるべく行くようにしている。その場所とれる魚介類や野菜、肉類にはどのようなものがあるのか知り、地元の人と話して、僕がまだ知らない食材やその調理法を覚えてもらう。話に花が咲くと、おもむろにどこからかタッパーウェアを取り出して「これ食べてみな」と言ってくれる人もいる。それはまさにどここの店に入っても注文することのできない地元の料理だ。郷土料理よりは華々しくはないが、しっかりとその土地に根付いてきた味。つましくて骨太の日本人の生活の味がする。和食の原点はこんなところにあるのかもしれないと思わせる、強さとうまさがあるそこにはつまっている。

僕は市場で食材を目で味わい、また舌で味わい、その感動を少しでも多く作品の上で表したいと思っている。というのも、僕はここ数年「紙のジャポニスム」をテーマに日本という国を、文化を見つめながら作品を作っているからだ。市場へ行くのも、ただおいしい食材に出会いたいから行くのではなく、作品のテーマを探すが本来の目的である。まだまだ知らない日本という国をもっと知りたい、という気持ちで僕を旅へと誘う。それは何も日本でのみ目的が達せられることではなく、海外に行った時も同じである。僕は海外へ行っても日本に出会ってしまう。二〇〇八年ニューヨークで個展を開いた際、数週間アメリカに滞在した。これはアメリカだけのことではないのだけれど、どこでも日本食レストラン

の多さに驚く。和食はヘルシー食、長寿食として海外でも人気が高い。ただしそこで出される料理はこれが和食？と首をひねってしまうのも少なくはない。それらは和食ではなく、ジャパニーズフードという名の全く新しい料理法なのかもしれないが、僕はこんなところで日本を見せつけられたような気持ちになった。アレンジされ進化した日本。異文化交流を通じて自国を知ると、思うのはまさにこういうことかと思つた瞬間だった。

二〇一〇年一月から約三ヶ月、文化庁より文化交流使として再びニューヨークの地を踏む。ここで僕は日本の文化を切り絵を通して人々に伝えつつ、また違った角度から日本を発見するだ

り。切り絵画家。大学建築科在学中に出会った切り絵に、パステル、アクリル絵の具、砂、布、和紙などテーマに応じ様々な材料を取り入れて独自の世界を開く。1999年東京のふるさと切手、2005、06年年賀葉書のデザインを担当。個展開催のほか、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌でも活躍。著書に『紙のジャポニスム・切り絵 久保修画集』（土屋書店）『恋する民謡一民謡えほん』（えほんの杜）など。久保修オフィシャルサイト <http://www.shu-kubo.com>

- 1 エッセイ 世界へ●世界から  
日本の食を訪ねて  
久保 修
- 2 特集  
トラ  
北の森の王者 アムールトラ …… 佐々木 史郎  
シンガポールの三つのタイガー …… 西原 大輔  
「虎の穴」をぬけて …… 櫻永 真佐夫  
中米のトラ …… 八杉 佳穂  
日米ふたつのタイガース …… 杉本 尚次

- 8 モノグラフ  
生きている異国への眼差し  
—江戸～明治の動物見世物の消息—  
笹原 亮二

- 10 地球ミュージアム紀行  
ラゴス現代美術センター  
ナイジェリアの新しい風  
川口 幸也

- 11 表紙モノ語り  
虎頭鞋  
塚田 誠之

- 12 みんぱくインフォメーション

- 14 人生は 決まり文句で  
「まあ、なんとか」  
早川 真悠

- 15 万国 津々浦々  
ナポレオンと戦ったモンゴル人たちの  
末裔と出会うの記  
小長谷 有紀

- 16 多文化をささえる人びと  
声なき声を電波にのせる  
多文化・多言語コミュニティ放送局 FMわいわい  
寺尾 智史

- 18 生きもの博物誌  
捕鯨者たちの大宴会  
〈ゴンドウクジラ〉  
岩崎・グッドマン まさみ

- 20 歳時世相篇  
ヴァカタワセ  
フィジーの年末の喧騒と新年祭  
丹羽 典生

- 22 フィールドで考える  
難民キャンプの市場から  
内藤 直樹

- 24 みんぱくウィークエンド・サロン  
研究者と話そう  
次号予告・編集後記

# 特集 トラ



虎とコブラの格闘の人形(インド)



大トラにのる猿の兵の影絵人形(カンボジア)



虎の張子(日本 岡山)



十二支、寅の土鈴(日本 大阪)



寅の絵馬(日本 青森)

干支は、十干と十二支を組み合わせて六〇年で還暦となる紀年法。十干が徐々に廃れたのに対し、十二支は動物が割り当てられているため今でも身近な存在だ。その寅年にあたる年初の特集として、トラを取り上げる。現在では生息する地域がごく限られていながら、毛皮の美しさや強さ、勢いの良さなどから多くの地域で様々なイメージがつくられ表現されるトラ。本号では、イメージとしてのトラも含め、様々な角度からトラを捉える。年末年始恒例の展示イベントもあわせてご覧いただきたい。

上の7点は民博が収蔵する資料。うち数点は年末年始展示イベント「とら」にも出演中です。

## 北の森の王者 アムールトラ

佐々木史郎  
民博 研究戦略センター

ロシア極東地域とシベリアをフィールドにして、先住民族の近現代史を主な研究テーマにしている。近年は森林開発と先住民の伝統文化振興活動との関係に関心をもっている。

アムールトラ(提供・札幌市円山動物園)



トラの姿をした精霊(セウエン)「ムハ」(個人蔵)。胃痛、腹痛時にこの精霊の像に供物を捧げて祈る。ナーナイのあいだでは腹痛、胃痛はこの精霊の尾の先の球が胃壁にぶつかることで起こると信じられていた

朝鮮半島に広く分布していた。そしてその地域では森の王者、あるいは特別な神聖な動物として崇拝された。たとえば、現在のロシア沿海地方とハバロフスク地方に暮らす

先住民族のウデヘヤナーナイのあいだでは、トラは森の動物のなかでももっとも畏敬すべき存在だった。V・K・アルセーニエフの『デルス・ウザーラ』(一九七五年に黒澤明の監督で映画化された)で、主人公のデルスがトラを「アンバ」とよぶが、アンバとはウデヘ語やナーナイ語で極度に畏怖すべきものを意味する。そして、そのようなトラに銃を向けることは絶対的なタブーだった。映画ではデルスが一度それを破り、以後精神的に追い詰められていく姿が描かれている。トラは、獵師たちにとっては獵運をもたらす動物でもある。ウデヘの民話には、クマに組み伏せられていたトラを助けた獵師がその後急に獵運に恵まれるようになったという話がある。私たちの調査に協力してくれた村一番の腕をもつといわれたウデヘの老獵師も同様の経験を話した。彼はあるとき、トラと至近距離で出会ってしまった。そのときの恐怖はたとえようもなかったというが、トラは静かに引き下がってくれたという。しかし、その後彼には獵運がついてきた。トラと出会った場所何度かシカを仕留めることができたのである。トラは恐ろしい存在だが、人びとはそのような動物に敬意を払い、その領域を侵さないようにしつつ、共存してきたのである。

絶滅の危機から保護へ  
二〇世紀の一〇〇年はアムールトラにとっては受難の時代だった。森林開発によって生息域は狭められ、餌となるシカ類も減少した。さらに、薬とされる骨や内臓、あるいは美しい毛皮をねらう人間たちによって殺戮され、トラは急速に数を減らし、絶滅の危機に陥った。ことに、ソ連崩壊直後の経済混乱のなかで密猟が横行した。そのため人ととの関係も悪化し、一九九〇年代にはトラが幹線道路沿いや集落近くにまで出没し、家畜だけでなく、人までが襲われるような事件がしばしば聞かれた。二〇世紀末以来の保護政策によってようやく数に回復傾向が見られるようになり、現在四五〇〜五〇〇頭ほどが極東ロシアの森に生息するといわれる。しかし、なお木材資源開発とトラの保護との両立は多くの問題を抱えている。アムールトラにはまだまだ困難な時代が続くであろう。



子どものトラの足跡。幼獣でも足跡はゆうに20センチメートルを超える(2003年ロシア連邦沿海地方ピキン川流域)



新日本プロレスのタイガーマスクの登場は、鮮烈だった。四次元殺法とはよくも名付けたものである。リングは、もはやレスラーたちを閉じ込める、ただの四角いジャングルではなかった。タイガーマスクがあらわれると、ロープも、ポールも、相手レスラーの肉体さえもが、めくるめく大胆な空中技を繰り出すための道具と化した。そ

れまでにないスピードに大興奮させられた私などは「さすが四次元！」と、意味もよくわからないまま、むやみに納得させられたものだった。力、技、反則のスポーツ

タイガーマスクは、虎の穴との死闘を通じて、力強く美しい美しさ、残忍などう猛さをまとった「本物のトラ」になった。しかし、つい

タイガーマスクは、虎の穴との死闘を通じて、力強く美しい美しさ、残忍などう猛さをまとった「本物のトラ」になった。しかし、つい

かしなが まさお 榎永真佐夫 民博 民族社会研究所

# 「虎の穴」をぬけず



タイガービール。氷を入れて飲む人が多い

シンガポールの第一の虎は、タイガービールである。アンカービールと並び、この国を代表する銘柄で、タイガービール

タイガーバーン・ガーデン タイガーといえば、かつてシンガポールには、タイガーバーン・ガーデンというテーマパークがあった。現在はハウ・パー・ヴィラ(虎豹別墅)と名前が変わっているが、日本人には旧称のタイガーバーン・ガーデンのほうが馴染み深い。タイガーバーンは、虎標万金油という軟膏の

にしはら だいすけ 西原大輔 広島大学大学院 准教授

# シンガポールの三つのタイガー

島内各所で盛んに飲まれている。歴史は古く、一九三〇年代から販売され続けている。 イギリスの作家アンソニー・バー



ハウ・パー・ヴィラ、旧称タイガーバーン・ガーデン (Photo by Eugene Tang/SingaporeSights.com)

英語名で、むかし私もひとつ買って使ってみたことがある。傷口に塗るとずいぶん治りが速かった。

この軟膏で大もうけした胡文虎(一八八二―一九五四)と胡文豹(一八八四―一九四四)の兄弟が、まず香港にタイガーバーン・ガーデンを開設、次いで一九三七(昭和一二)年にシンガポールにもオープンさせた。香港のほうはすでに閉園されてしまったので、現在はシンガポールにだけ残っている。

ハウ・パー・ヴィラを訪れた日本人の口からは、キッチュ、グロテスク、けばけばしい、といった日本語が自然と出てくるだろう。安っぽい作りの人形に、派手な原色のペンキが塗られ、作りは大雑把だ。さらにおもしろいのは、彫刻が中国の道徳や歴史を安直に訴えかけていることだろう。なにか悪い夢でも見たような気持ちにさせられる。

にプロレス界の頂点に立つのかというラスト、とつぜん姿を消してしまふ。トラはミステリアスでもある。

## 凶暴なトラ

私の思い込みかもしれないが、古来、東洋の物語は、トラの凶暴さをことさらに強調してきた。もちろん、住民たちの恐れ



森の国ラオスのフアン県では、自然保護をよびかける看板にトラが描かれている

二一世紀、四代目タイガーマスクは、「黄色い悪魔」に戻った。だが、トラの冷酷非道は、もはやレトロなイメージ。虎の檻も、ベトナムの史跡認定を受けた。アメリカでは、虎の穴と対極的な「みなしごランド」とコンセプトに近い「ネバーランド」さえ、主を失った。アニメ、マンガ大

## 虎に襲われた 弥次さん喜多さん

さて、シンガポール第三の虎は、近代日本文学のなかにある。明治の初めの戯作に、仮名垣魯文の『西洋道中膝栗毛』という本がある。『東海道中膝栗毛』でお馴染みの弥次さん喜多さんの孫が、西洋見物のために欧州航路を旅してゆく滑稽なお話だ。ただし、江戸っ子の弥次喜多両人は英語ができないので、通訳の通次郎という第三の人物が登場する。 弥次さん喜多さんは、困ったことにシンガポールでスイカ泥棒を働く。すぐに捕まって杭に縛りあげられた二人の前に、突然虎が現れた。絶体絶命に陥り気が失うが、目を覚ましてみると、虎だと思っただけ船員のモテルさんだったという笑い話である。



スイカ泥棒をして捕まる弥次さん喜多さん(出典・興津要 編 『明治文学全集1 明治開化期文学集(1)』筑摩書房)

# 中米のトラ

やさぎ よしま  
八杉佳穂

民博 民族文化研究所

昨春に催された特別展「千家十職×みんぱく——茶の湯のものづくりと世界のわざ」に三年をかけた。横道にそれたが、今はマヤの研究に戻っている。

新大陸にはトラはいないが、トラによく似たジャガーがいる。とはいえず、トラは縞模様であるのに対し、ジャガーは梅花紋で中に黒点があるところが違う。伝説によると、梅花紋は太陽になろうとして自ら火に身を投じたことよってできたものという。しかしどちらもネコ科のヒョウ属である。だから、新大陸にやってきたスペイン人が、旧大陸にいなかったジャガーを見て、トラといったのも当然のことと頷ける。

トラはスペイン語でティグレという。英語のタイガーと同じ語源である。一六世紀以降作られてきた中米のいろいろな現地語の辞書で、ジャガーにあたる語を引くと、いずれもティグレと訳がついている。すなわちトラである。だからジャガーの仮面はトラ仮面と称され、トラ仮面をつけて現在でも演じられている踊り

メキシコ ゲレロ州のトラ仮面(アメリカ展示)



セロットもネコ科であるが、オセロット属で、大きさはジャガーの半分くらいで、体重は七分の一くらいしかない。ちなみにジャガーという語は南米のトゥピ・グアラニー語が語源である。

はトラダンスといわれている。

## 地下世界と王の権威を象徴

トマトとかチレなど、スペイン人が初めて目にしたものの多くは、アステカ文明の言語であるナワトル語から借用されたが、ジャガーはオセロトルという。ところがスペイン人によりティグレとよばれたため、オセロトルはジャガーの語源とはならず、オセロットの語源となった。オ

ジャガーは、なんといっても中米最大の猛獣で、強い。だから王権に関係した。マヤの王様の名前に取り入れられたり、ジャガーの皮をかけた玉座や王を守るためのジャガーが石碑などに描かれている。ジャガーは夜行性で、水辺を好むため、水底にあるという冥界の象徴ともなっている。スイレンを飾りネッカチーフをつけたジャ

ガーは、首切りや腹裂きなどの犠牲儀式の執行者として出てくる。図像学的には、太陽、夜、星、雷、雨、水、洞窟、冥界、死、再生などと関係し、地下世界の恐ろしき存在と権威を象徴する動物となっている。

## ジャガーの日に生まれた人

中米には、一三の数字と二〇の日を組み合わせた二六〇日曆がある。二〇の日の一つにオセロトルがある。

虎のマークいりのTシャツ、虎のぬいぐるみも売っているし、虎印のついた鉛筆でスコアカードをつけていると、まるで甲子園球場にいるような気分になったことを思い出す。現在は都心再開発地に竣工(二〇〇〇年)したコメリカ・パークに移っている。古きよき時代をとりいれた新古典様式の新球場にも、いたるところに虎の像があり、スコアボード上

# 日米ふたつのタイガース

すぎもと ひさつぐ  
杉本尚次

民博 名誉教授、総合研究大学院大学 名誉教授  
大阪市立大学 大学院修了、文学博士。国立民族学博物館教授、関西学院大学教授を経て現在、民博・総研大名誉教授。文化財の保存・再生・活用と日米野球比較文化論。

## スポーツチームとしてのタイガース

「トラ」といえば「阪神タイガース」は見逃せない。ここ二年は不振だったから、干支「寅」に合わせて大奮起を願いたいところだ。

野球では、メジャーリーグ・ベースボール(MLB)のデトロイト・タイガースをはじめ、韓国プロ野球の起亜タイガース、中国の北京猛虎、台湾の三商タイガース。最近のMLB多国籍野球時代を担う中南米のドミニカ、ベネズエラ、キューバ、メキシコの野球チーム名にもタイガースを冠したものがみられる。野球以外にも、イングランドのプロラグビーチームのレスター・タイガース、オーストラリアのプロバスケットボールのメルボルン・タイガース等々、さらにアメリカの大学スポーツチームまで含めると、タイガースは大人気だ。虎の力強さ、迫力、神秘的な力



目が緑色に光るコメリカパークのトラ(提供・ミシガンカフェ)

などが背景にあるからだろうか。ここでは、阪神タイガースと、そのチーム名の本家といえるMLBのデトロイト・タイガースをとりあげてみよう。

## 本家デトロイト・タイガース

デトロイト・タイガースは、一九世紀末からある古い球団だが、一八九五年監督になったG・スターリングが、黒と黄色がかかった茶色のタテ縞のストッキングを採用した。これが虎の縞模様に見えるのと若い記者らが指摘し、まもなく球団のニックネームになってしまった。私は一九八六年に初めてMLB観戦をしたのがタイガー・スタジアムであった。



甲子園球場売店のトラ(撮影・久保正敏)

名物風船あげ(2005年6月25日、巨人-阪神戦)



メキシコのシヨチストラワカ村のトラダンス(ビデオテークより)

マヤではイシュの日に当たる。中米には生まれた日によってその人の性格や将来を占う習慣があった。ちょうど寅年の人が、トラをイメージしたような積極果敢で強引な性格が付与されるように、その日に生まれた男性は、勇気があつて、恐れを知らず、気が良くて、威厳があるといったプラスの面とともに、傲慢でうぬぼれが強く、戦い好きといった負の面をもつ。いっぽう女性には、独立心が強く、寛大である半面、傲慢で人をばかにするといった性格が付与されている。

私も馬齢を重ね還暦となった。ジャガーはシャーマンの変身ともいうが、新しい人格に変身できるとしたら、強くて人を守るプラスの面をもったトラになりたいものである。にも巨大な虎がふたつ。この像はタイガースの選手がホームランを打つと虎の目が緑色に光るなど、甲子園より一層虎の威力を誇示しているようにみえる。D・タイガースは〇六年にワイルドカードからリーグ優勝を果たしたが、低迷期間が長いのも特徴で、久しぶりの優勝に町ぐるみで熱狂するところなど、どこか阪神タイガースファンと似ている。デトロイトは世界不況もあって自動車メーカービッグ3の経営難と連動するかのよう都市人口の減少が続いている。D・タイガースの躍進で活気を取り戻したいところだろう。

## リニユーアル甲子園球場

### ートラ年を迎えて

阪神タイガースは球団結成時の一九三五年頃、阪神工業地帯が日本最大の工業生産を誇っていたから、アメリカ重工業の核心、自動車の町デトロイトに本拠地をおくチームの名をつけたといわれている。

阪神タイガースの本拠地甲子園球場は、日本最古(一九二四年)の大型スタジアムで、今年完成する大改修工事の軸になったのは、安全性と快適性の向上、そして歴史と伝統の継承である。「トラ」年にちなんで阪神タイガースの奮闘あつてこそ、都市や地域の活性化に結びつくのだ。

# 生き残っている異国への眼差し —江戸〜明治の動物見世物の消息—

江戸時代、見世物の興行は、江戸・京・大坂をはじめ各地で盛んにおこなわれ、人びとにとって身近な娯楽として楽しまれていた。川添裕氏によれば、江戸後期の見世物は、ほぼ半分近くを籠や乾物などの意外な素材で歴史や伝説の名場面を作って見せる細工見世物が占め、ついで軽業・曲芸、動物見世物と続き、これらで全体の九割を越えていたという(川添裕『江戸の大衆芸能 歌舞伎・見世物・落語』)。普段見慣れない動物も、人びとの好奇心を大いにかき立てる題材であったことがわかる。

## 猫を色染めしたトラの登場

当時の動物見世物の内容については、朝倉無声が詳しく紹介している(朝倉無声『見世物研究』)。それによれば、文化文政期(一八〇四〜三〇)だけでも四〇種以上の動物が見世物に登場したという。そのなかには、「山ぶた」(イノシシ)・ツル・オオカミ・カワウソ・クジラ・「水豹」

(アザラシ・アシカ)・マンボウなどの国内産でもめつたに見ることができない動物、「二形犬」・六足のウマ・三本足のニワトリなどの突然変異の奇形動物のほか、ヒツジに絵の具で彩色した「ラシヤメン」、「管狐」という触れ込みの単なる子ギツネ、猫を染めたトラといった「イカ物」も含まれていた。こうした動物見世物の盛行は、民博が所蔵する錦絵や辻ビラなどからもうかがえる。

## 舶来動物ナンバーワンはラクダ

当時、動物見世物で大いに人気を博したのが、異国渡来の動物であった。比較的早いのは鳥類で、寛永期(一六二四〜四四)にはクジャクが見世物となっている。その後もクジャクの見世物はたびたびおこなわれたが、そのほか、「唐鳥」や「和蘭渡り」の「名鳥」(オウム・インコ)、「阿蘭陀船」が船載した「駝鳥」(ヒクイドリ)なども見世物に登場した。舶来の鳥の飼育が富裕層



「新渡舶来之大象」(文久2年1862)

## 笹原亮一

民博 民族文化研究部

専門は、民俗学、民俗芸能研究。最近九州各地の島々を巡り歩き、祭りや芸能の伝播や定着について考へている。

川添裕氏によれば、三〇カ所以上で興行が確認できるといふ。

## トラ見物客で旅館も満杯

幕末の開国以降、今度は横浜経由で異国の動物がもたらされるようになった。万延元年(一八六〇)横浜にオランダ船が船載したヒョウは、両国でトラという触れ込みで見世物となった。ヒョウは、天保元年(一八

に広まった後も、鳥の見世物は、一般の人びとのあいだでの人気は衰えず、幕末まで興行がおこなわれた。舶来の動物見世物で最大の人気を博したのはラクダである。文政四年(一八二二)に長崎にもたらされたつがいのヒトコブラクダは、大坂・

三〇)既に名古屋で見世物興行がおこなわれていたが、江戸では初めてということ、大勢の見物人がやって来た。そして、翌文久元年(一八六一)には正真正銘のトラが登場した。横浜にオランダ船が船載したもので、江戸の各地で見世物興行がおこなわれると、市中に止まらず近郊近国からも見物人が大勢集まり、そうした人びとで方々の旅館が満杯に

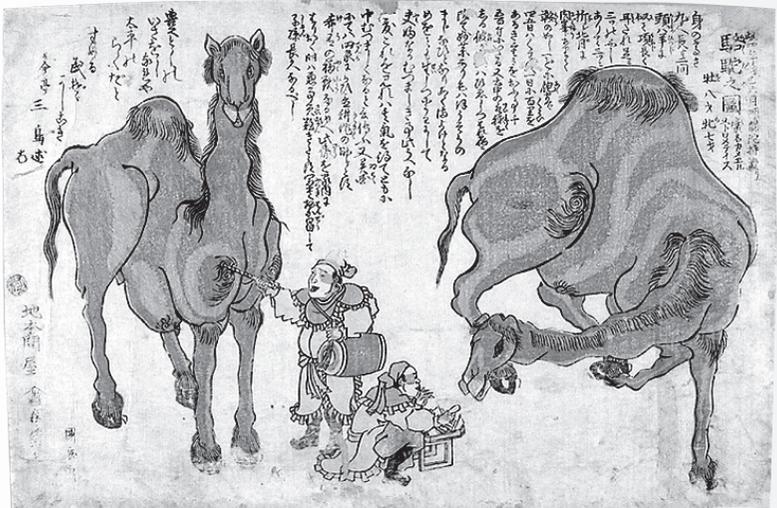
## 博物館への系譜

明治時代になると、そうした動物いわば「生きている異国」への人びとの眼差しは大きな変化を迎える。異国からやって来た「曲馬」(サーカス)興行の際に、従来同様の珍奇を愛でる利益を期待する娯楽としての展覧もあいかわらずおこなわれた。その一方で、異国の情報を正確かつ系統的に提供する「教育」を堂々と掲げた博物学的な動物の展覧がおこなわれるようになった。こうした動向は、明治一五年(一八八二)の上野動物園の開園と軌を一にする。そして、現在多くの動物園や水族館が法律上は博物館となっていること、そうした動向はおそらく無関係ではない。

とはいえ、それで、我々の生きていく異国への眼差しがまったく教育的・科学的なかたちに編成し直されたわけではないことは、昨今の動物園の人気や、トラを見ると「今年が寅年だから」とつい考えてしまう我々の姿勢がよく示している。



見世物 辻ビラ「虎の見世物」(万延元年1860)



「駝駝之図」(文政期1818-30)



ラゴス現代美術センター Centre for Contemporary Art, Lagos

# ナイジェリアの新しい風

現代美術の振興と若手作家の育成を目標にギャラリー活動を展開するのは、  
気鋭の女性美術批評家。



ラゴス現代美術センターの外観



ギャラリー代表のピシ・シルヴァ氏

ナイジェリアのラゴスといえば、なんとといっても治安の悪いことで有名だ。そのラゴスを、九月のはじめに訪ねる機会があった。

今回の目的のひとつは、二〇〇七年の一二月に新しくできた民間の小さなギャラリー「ラゴス現代美術センター」を訪ねることであった。

## 現代美術を後押しする一人の女性

このセンターは、イギリスなどによくあるNPOが運営するギャラリーであり、展覧会や講演会、シンポジウムなどを頻りに企画している。主宰しているのはピシ・シルヴァという、この数年来、ラゴスをベース

に現代美術の評論を積極的に手がけている気鋭の美術批評家である。大学で美術を学ぶためにロンドンに渡ったあと、しばらく同地に留まってキャリアを積んだ彼女は、母国の現代美術を後押しするためにナイジェリアに戻り、やがてこの施設を立ち上げたのである。

正面の入口をポルティコ(柱廊)で構成した三階建の鉄筋のきれいなビルは、ワンフロアの面積が二〇〇平米ほど。その二階が展示室で、三階は現代美術関係の書籍や雑誌を集めたライブラリーになっている。

展示室は、現代美術の展示にふさわしく白い壁と床で覆われていて、一方のライブラリーは黄色を基調と



かわぐち ゆきや  
**川口 幸也**  
民博文化資源研究センター  
専門はアフリカ同時代美術、展示表象論。美術を通して、アフリカの内外でアフリカがどのように語られているのかをテーマとしている。

している。決して広いとはいえないが、それでもロンドンやニューヨークあたりにある民間のギャラリーにまったく引けを取らない空間だ。ターゲットにしているのは、ビデオや写真、インスタレーションの作品を発表している若手のアーティストなのだという。私が行ったときは、ちょうど開設以来の二年間を振り返る展示がおこなわれていた。

**主宰者の意気込みそのままに**  
ピシ・シルヴァが書いた文章は何度も目にしたことがあったが、彼女と会うのは今度が初めてであった。



講演会に集まった関係者

小柄だが、見るからに精神的な彼女は、人なつこい笑顔が印象的な女性であった。

南アフリカを除くアフリカ諸国では、いわゆる博物館を別にすれば、美術館をもつ国はさほど多くはない。まして近代美術館や現代美術館をもつ国となると数えるほどである。ナイジェリアはその数少ない例外のひとつである。

もうだいぶ前から、ラゴスには国立の近代美術館があったし、民間の小規模な美術館もあった。けれども、

新しくできたこのセンターは施設の面でも出版広報も含めた活動の面でも、これまでにあったナイジェリアのどの美術館とも違う。ピシ・シルヴァの意気込みそのままにアクティブなのだ。ラゴスの、そしてナイジェリアの美術界は、いま確実に変わろうとしている。ラゴス現代美術センターが投じた一石が、今後、ナイジェリアとアフリカの美術界にどのような波紋を広げていくのか、注意深く見守っていききたいと思っている。

自転車をかたどった作品(手前)



奴隷運搬船をモチーフにした作品

## 表紙モノ語り

### 虎頭鞋 (フートウシエ)

民族：壮(チワン) 国名：中国  
1998年収集  
標本番号：H0215323



塚田 誠之  
民博 先端人類科学研究部

中国南部諸民族の歴史民族学的研究、とくに壮(チワン)族の社会・文化の研究に従事。著書に『壮族文化史研究』(第一書房)他。

中国では虎は百獣の王で、悪鬼を鎮圧する力があると考えられてきた。寺廟や建築物の壁に虎や龍の絵が画かれたり、虎が月に吠えている絵が賞美されてきた。虎の威力を借りて悪魔を払う目的で、つま先に虎頭の飾りがついている靴を子どもにも履かせる。これが虎頭鞋である。子どもの言葉で虎を「猫猫」とよぶことから「猫頭鞋」ともよばれる。子どもが一歳を過ぎて歩行が自由になったころに履かせる。

ふるく北京では、子どもが生まれると親戚・友人がまずこの靴を贈った。また山西省では、女たちが、五月の端午節に子どもたちのために作った。靴に眼がついているのは、子どもが歩行する際に、道がよく見えて、つまづいたり、汚物を踏まないよう注意力が身につくと考えら

れてきたからだ。

靴の後ろにしっぽがついているものもあるが、これは手に下げてもち運ぶためである。靴のほか、虎の皮の斑紋模様を染めた衣服「虎衣」を着るか、虎の頭の形をした帽子を被るかしても魔除けに効果があるといわれる。

河北省では、虎以外に、豹、龍、獅子などの強悍な猛獣、あるいは牛、羊、犬などの家畜をかたどった靴をはかせる。家畜のようにすこやかに育ち、また猛獣のように生氣に満ち活力にあふれるように願うことだという。

野生の虎は、かつては『水滸伝』に武松の虎退治が登場するなど人間世界に身近な動物だったが、現在では東北部にわずかに数十頭残るだけといわれている。



年末年始  
展示イベント  
「ユリ」

◆「ユリ」を追って世界一周！  
実施日 一月一日(月・祝)  
時間 一時〜一時三十分  
一四時〜一四時三十分  
会場 本館一階エントランス  
常設展示場  
参加費 無料

◆研究者によるギャラリートーク  
実施日 一月一日(月・祝)  
時間 一時〜一時三十分  
一四時〜一四時三十分  
会場 本館一階エントランス  
常設展示場  
参加費 無料

◆MMP企画「おりがみて遊ぼう！ 千支シリーズ『黄』」  
実施日 一月一日(月・祝)  
時間 一時三十分〜一五時  
一〇分の間、七回実施(各回三〇分ずつ)  
会場 本館一階エントランス  
定員 各回二〇名程度(当日受付)  
参加費 無料  
※対象は小学一年生からです。  
お問い合わせ  
情報企画課情報企画係  
電話 〇六六八七八八五三三  
(平日九時〜一七時)

◆春のみんなくフォーラム  
二〇一〇年「西アジア再発見」  
大村次郷写真展「西アジア、祈りの風景」  
会期 一月八日(金)〜三月三〇日(火)  
会場 本館一階エントランス  
観覧料 無料

①「織機をつくる」  
実施日 一月十七日(日)  
時間 一時三十分〜一六時三十分  
会場 本館一階エントランス  
定員 一五名(事前申込制・抽選)  
実費 五〇円  
申込締切日 一月六日(水)  
参加申込方法  
参加人数・参加者氏名・年齢・代表者の郵便番号と住所・電話またはFAX番号を書いて左記ワークショップ(じゅうたん)係までお申し込みください。  
E-mail: workshop@tdc.ninpaku.ac.jp  
FAX 〇六六八七八八七五三三

◆「織機をつくる」  
実施日 一月十七日(日)  
時間 一時三十分〜一六時三十分  
会場 本館一階エントランス  
定員 一五名(事前申込制・抽選)  
実費 五〇円  
申込締切日 一月六日(水)  
参加申込方法  
参加人数・参加者氏名・年齢・代表者の郵便番号と住所・電話またはFAX番号を書いて左記ワークショップ(じゅうたん)係までお申し込みください。  
E-mail: workshop@tdc.ninpaku.ac.jp  
FAX 〇六六八七八八七五三三

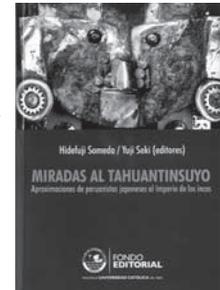
②「じゅうたんを織ろう」  
実施日 一月十九日(火)〜三月二七日(土)までの火・木・土・日・祝日  
時間 一時〜二時と、二時〜一六時の間、随時  
会場 本館一階エントランス  
※申込不要。参加は無料です。  
絵本読み聞かせ「絵本で旅する詩の国」  
実施日 二月七日(日)  
会場 本館一階エントランス  
※申込不要。参加は無料です。

◆「みんなくワールドシネマ オフサイド・ガールズ」  
実施日 一月三〇日(土)  
時間 一時三十分〜一五時三十分(開場 一三時)  
会場 講堂  
定員 四五〇名(先着順)  
参加費 無料  
\*当日一〇時より会場入口にて整理券配布。  
お問い合わせ  
広報企画室企画連携係  
電話 〇六六八七八八二〇  
(平日九時〜一七時)

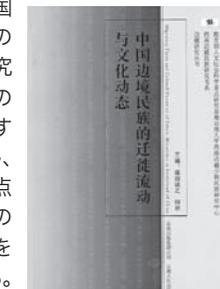
◆音楽展示・言語展示を改修のため閉鎖しています。  
期間 三月三日(火)まで(予定)  
●休館日・無料観覧日のお知らせ  
年始は一月四日(月)まで休館します。  
一月一日(月・祝)成人の日は、常設展を無料で観覧いただけます。ただし、自然文化園を通行される場合は、入園料が必要です。  
\*詳細については、みんなくホームページをご覧ください。

刊行物紹介

■Hidefujii Sameda / Yuji Seki (editors)  
『Miradas al Tahuantinsuyo: aproximaciones de peruanistas japoneses al imperio de los Incas』  
FONDO EDITORIAL 価格:1,500円(税込)  
(スペイン語)  
近世ヨーロッパ史観のもとで誕生した南米インカ帝国に対するイメージについて、錯綜する生成・流用の過程および実態を分析する。日本人研究者がスペイン語で執筆し、現地ペルーの学界に挑んだ意欲的な論集。



■塚田誠之・何明 編  
『中国辺境民族的遷徙流動と文化動態』  
雲南人民出版社、非売品(中国語)  
中国で開催した国際シンポジウムの成果で、日中の研究者24名が、中国の国境地帯に暮らす諸民族を対象とし、移動と交流に焦点を当て、また最新の民族文化の動態を幅広く論じている。



■池谷和信 編著  
『地球環境史からの問い ヒトと自然の共生とは何か』  
岩波書店 定価:2,730円(税込)  
いま環境問題が人類への急務の課題となっている。その一方で一面的なエコポリティクス(自然保護政策)のため、古くから自然と共生してきた人々が排除され、各地で論争や紛争まで引き起こしている。本書はヒトと自然=地球の生態との歴史的な関わりを学際的に明らかにし、「ヒトと自然の共生」とは何かを問いなおす。



みんなくゼミナール

会場 国立民族学博物館 講堂  
時間 13:30~15:00 (13:00開場)  
定員 450名(当日先着順)  
参加費 無料

展示場をご覧になる方は、観覧料が必要です。

第380回 1月16日(土)  
対談 アレクサンドロスの道を撮る  
—写真家、大村次郷×山中由里子  
講師 大村次郷(写真家)、山中由里子(民族文化研究部准教授)  
アジア各地を隈なく写真に撮り続ける大村次郷氏との対談。大村氏のライフワークの一つはアレクサンドロス大王の足跡を追い、写真に撮ることです。大王の東方遠征の行程を写真で辿りながら、大村氏が現地での体験を語り、アレクサンドロス伝説を研究する当館准教授・山中由里子が各地にまつわる逸話や伝承などを紹介します。



アレクサンドロス 象牙彫刻 タジキスタン国立博物館所蔵 (大村次郷撮影)

第381回 2月20日(土)  
あたらしいアフリカ展示のメッセージ  
講師 竹沢尚一郎(民族文化研究部教授)ほか  
30年前に誕生した民博のアフリカ展示が、2009年3月、はじめて全面的に改修されました。アフリカを知らない人が見ても、アフリカ理解の手がかりを得られる、そんな展示にしたい。アフリカ展示チームは、そのような思いで展示作りに励んできました。「展示ができるまで」の熱い議論を、少しだけ紹介します。



友の会

友の会講演会  
会場●国立民族学博物館  
第5セミナー室  
定員●96名(当日先着順、会員証をご提示ください)

第380回 2月6日(土)  
時間●14:00~15:30(13:30開場)  
ガンディーの大英帝国  
講師 杉本良男(民族社会研究部教授)  
長くイギリスの植民地であったインドの人びとは、イギリスをどのようにとらえているのでしょうか。必ずしも支配された者としての被害者意識だけではないようです。言語や生活文化、宗教など大きな影響を受けている部分もあります。インド独立の父とも称されるガンディーに注目して考えます。

第381回 3月6日(土)  
時間●14:00~15:30(13:30開場)  
アジアにとってのアジア  
講師 田村克己(民族社会研究部教授)

東京講演会  
会場●JICA地球ひろば  
セミナールーム202  
定員●40名(要申込、メールかFAXで下記へお申込みください)

第90回 1月17日(日)  
時間●14:00~15:30(13:30開場)  
先住民の現在を読み解く(1)  
アフリカの狩猟採集民の事例から  
講師 池谷和信(民族社会研究部教授)

第91回 2月28日(日)  
時間●14:00~15:30(13:30開場)  
先住民の現在を読み解く(2)  
先住民としての「権利」獲得とその後  
講師 松山利夫(民族文化研究部教授)  
世界に先駆けて先住民の同化政策から共生政策への転換をおこなったオーストラリアですが、再び大きな転換点を迎えています。アボリジナルの社会システムや家族関係の視点から、その政策の裏側にある事情を読み解きます。

国立民族学博物館 友の会

電話 06-6877-8893 ファックス 06-6878-3716  
電話でのお問い合わせは月曜~金曜日9時から17時までをお願いします。  
http://www.senri-f.or.jp/ E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

ミュージアム・ショップ

遊牧民の伝統的な毛織物  
「キリム」

昼夜、寒暖の差がはげしい、中央アジアの砂漠地帯。そこで生活をいとむ遊牧民達が愛用している「キリム」は、羊やラクダの毛を使い、母から娘へと



ポーチ(1,890円~)・クッションカバー(3,045円~)

受け継がれる個性的な模様を織り込んだ、伝統的かつ実用的な毛織物です。まだまだ寒い日の続く初春。長年現地で使用されてきた「キリム」を再利用し、素材としてとりいれた様々な商品をミュージアム・ショップでも紹介しております。目に美しく、触れてあたたかな「キリム」。是非手にとってご覧ください。

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112  
ファックス 06-6876-0875  
水曜日定休  
ウェブサイトもご覧ください。  
オンラインショップ  
「World Wide Bazaar」  
http://www.senri-f.or.jp/shop/  
E-mail shop@senri-f.or.jp



カルムイクの金閣寺。ヨーロッパ最大の仏教寺院と言われている



## 万国津々浦々

●カスピ海に向こう側  
カルムイク共和国(正式名称はカルムキヤ・ハリムグ・タングチ共和国)はボルガ河の流れるステップに位置している。一六三〇年、ジュンガリア地方の内訌を避けて西に移動するうちにとうとうカスピ海まで到着したモンゴル系遊牧民の、末裔たちの国である。一七七一年、およそ九万人が新疆へ帰還したけれども、ボルガ河の右岸ないしカスピ海の西側に居たおよそ三万人はここにどどまった。

●「キヤキヤ」の日常  
ジンバブエは、二〇〇〇年に政府が白人農地を強制接収して以来、欧米諸国との対立が硬直化し、二〇〇八年には年間インフレ率が二億パーセントを超えるほど、著しく経済が悪化した。一般の人びとにとっては毎日パンを買うのは贅沢なうえ、物資不足で店頭にはパンが並ばないことも多かった。  
さきほどの友人は、モザンビークまで行って小麦粉二五キログラムを二五アメリカ・ドルで調達してきた。料理もあまりできない若い男性が、オーブンも使わずに一人でパンを焼くのは、なかなかたいへんそうだ。それでも、彼は小麦粉を手でできただけ、ましのだ。

●文化的要塞としてのカルムイク  
海外から参加した研究者はそれほど多くはなかったけれども、しっかりと組織された会議であった。ロシアへの統合の歴史を強調するという政治的目標が明瞭に貫徹されていた。チエチエンやグルジアなど容易に解決できない民族問題をほらんだカフカス地方はすぐ南にある。ロシアにとってカルムイクとの平和的な関係は、戦略的にたいへん重要であることがおのずと知れる。地元のカルムイク人たちは、ロシア本体にそのように接合されることを進んで選んでいるかのようである。もし、それを責めようものなら、他にどんな選択肢があるというのか、ときつと反駁するだろう。  
中国でも、新疆ウイグル自治区に住むオイラート・モンゴルたちは優等生の道を選んでいられるらしい。ロシアと中国という巨大な国にそれぞれ接合されて少数民族となった彼らは、集団として生き別れてから数世紀を経てカスピ海の西側で再会し、互いの境遇が案外似ていることを確認した。そして、彼らは言う。もしロシアと中国の関係が冷えたなら、また何年も会えなくなりますね、と。



会議参加者を出迎えるカルムイクの娘たち



モンゴルおよび中央アジアにおける遊牧民を対象とする文化人類学的研究に従事。近年は、社会主義のもとで近代化を推進してきた人びとにインタビューをおこない、現代史に関する口述資料を作成している。

小長谷有紀  
民族社会学研究所

## ナポレオンと戦ったモンゴル人たちの末裔と出会うの記

一九九八年、大モンゴル展を実施した際に、国際シンポジウム「モンゴル研究のパラダイムの転換」を開催した。そのとき、アメリカのフィラデルフィアからやってきたブルヒーノフ氏は、私が初めて出会ったカルムイク人だった。彼はカスピ海の西側にある故郷について、市場経済への移行がままならぬ難しさを熱く語った。それ以来、私はぜひいつかカルムイク人たちの故郷に行ってみたくて願ってきた。願っていたらいつか行けるにちがいないとも信じていた……

カルムイクとは、トルコ語で「居残る」を指す言葉からの命名だとする説がいまのところ有力である。彼らが居残ったのは、ボルガ河の水が解けて渡れなくなったためだ、と言われている。ナポレオンを迎え撃つロシア軍のなかには、このカルムイク人たちも参加していたのだ。

●その時その時できること  
現地語シヨナ語のコミュニケーションでもっとも重要なのは、あいさつである。「お元気ですか?」「あなたが元気なら、わたしも元気です」「わたしは元気です。お家の方はどうですか?」  
あいさつでは、相手の健康や仕事、家庭、人生について質問しあうやりとりがえんえんと続く。ジンバブエでの暮らしは日々苦しくなる一方だ

## Kiya-kiya

キヤキヤ

シヨナ語のストラング(俗語)で、理想からはほど遠いけれど、まあなんとかしのげるという程度の都合や具合を表す。オーブンのない台所で、電気コンロと鍋を使って焼いた彼のパンは、決しておいしくはないけれど、まあ、なんとか、ぎりぎり食べられるといった出来だったらしい。

シヨナ語のストラング(俗語)で、理想からはほど遠いけれど、まあなんとかしのげるという程度の都合や具合を表す。オーブンのない台所で、電気コンロと鍋を使って焼いた彼のパンは、決しておいしくはないけれど、まあ、なんとか、ぎりぎり食べられるといった出来だったらしい。

こんなあいさつを交わすとき、彼らは必ずしも悲嘆に暮れているわけではない。むしろ、親しい友人同士のおこぼれで、明るい笑いすらおこる。混沌とした現在のジンバブエでは、大学を出てまともな職に就き良い暮らしをするという常識は通用しない。その時その時できることをし、一日一日を回していく。その現実を厳しく理想とはほど遠いが、それを語る若者や人びとのようすは、思いのほか明るい。

## 人生は 決まり文句で

## 「まあ、なんとか」

南部アフリカの国ジンバブエの首都ハラレで調査をしていた二〇〇八年一月。真夜中に友人から携帯電話にメッセージが届いた。緊急の用事でもなく、たわいのない内容だった。こんな夜遅くに何をしているのかと彼に聞いてみると、一人でパンを焼いているのだという。  
●まあ、なんとか  
次の日、パンの出来はどうだったのかたずねると、こんな返事が返ってきた。  
Ndezekungokiya-kiya simz ndisina stove ine oven.  
(よくはないけど、まあ、なんとか。オーブンのない台所から)

その時その時できること  
現地語シヨナ語のコミュニケーションでもっとも重要なのは、あいさつである。「お元気ですか?」「あなたが元気なら、わたしも元気です」「わたしは元気です。お家の方はどうですか?」  
あいさつでは、相手の健康や仕事、家庭、人生について質問しあうやりとりがえんえんと続く。ジンバブエでの暮らしは日々苦しくなる一方だ

が、こうしたあいさつが変わることはない。水道から水が出なくても、何日も電気が止まっても、「元気ですよ、だいじょうぶですよ」とお決まりのやりとりが交わされる。いつぼう、親しい若者たちのあいさつでは、あいさつに「キヤキヤ」が使われたりする。  
Ndiri kungoita kiya-kiya.  
(よくはないけど、まあ、なんとかやってるよ)



パンを路上で売る人たち。値段は高め



道端に捨てられたジンバブエドル。現在は廃止され、外貨が使用されている



早川真悠  
大阪大学大学院博士後期課程  
日本学術振興会特別研究員G  
COE  
専門は文化人類学。ジンバブエの首都ハラレにおいて長期調査をおこない、都市住民の生活苦と経済活動について研究している。

多文化を  
ささえる  
人びと

# 声なき声を電波にのせる

## 多文化・多言語コミュニティ放送局 FMわいわい

外国人が直面した大震災という試練。それを乗り越えるためのサバイバル・メディアとしてFMわいわいは産声をあげた。そしていま、ふだん着の多文化メディアとして、地域に密着しつつ世界にはばたこうとしている

### 阪神・淡路大震災で 取り残された人たちの声として

一九九五年一月一七日未明、神戸市西部、凍てつく長田の町が激しく揺れた。木造住宅密集地域であった長田では、多くの家屋が倒壊し、まもなく猛火が町じゅうを襲った。多くの死者、そして救援を待つ人のかには、たくさんの外国人がいた。長田に集住していた在日コリアン、ベトナム人の多くも、寒空のもと身を寄せあい避難生活をおくることになった。こうしたなか、日本語がわからない被災者は、必要最小限の情報さえ得られず、コミュニティ内のデマも混ざったうわさを頼りに手探りで命をつなぐという、闇のなかも同然の状態に放りこまれた。

当時、大阪市生野区には在日コリアンたちが運営するミニFM局「FMサラン」があった。そのスタッフは寸断された道路をたどり、

重い送信機を担いで長田の町に乗り込んだ。関東大震災の悪夢の再来をおびえる被災地の在日コリアンがきかざりだった。こうして、震災二週間後の一月三〇日、韓国・朝鮮語および日本語による震災情報を放送するミニFM局「FMヨボセヨ」が発足した。

一方で、日本語能力の十分でないベトナム人被災者は、さらに大きな不安を抱えながらくらししていたが、震災三カ月後の四月一六日、被災ベトナム人救援連絡会が中心となり、ミニFM局「FMユーメン」が発足した。このFM局は、ベトナム語だけでなく、フィリピン人へのタガログ語・英語、南米出身者へのスペイン語、そして地域住民に向けての日本語での放送もはじめた。カトリック鷹取教会（現・カトリックたかとり教会）内のボランティア救援基地に生まれたこの小さな放送局にFMヨボセヨとFMサランのスタッフは

支援をおし、自然とマイノリティどうしの共助・協働が成立していった。これこそが、FMわいわいの生みの親となったのだ。

### FMわいわいのスタートと挫折

震災半年後の七月一七日、FMヨボセヨとFMユーメンが統合してミ



特別展「多みんぞくニホン—在日外国人のくらし」会場から、12回にわたり多言語で実況放送した（2004年4-6月）（提供・庄司博史）



FMわいわい旧スタジオ（1996年撮影）（提供・FMわいわい）

み立てた、質素な木造のスタジオだった。その後一九九六年四月には放送言語にポルトガル語が加わり、FMわいわいは順調に推移しているように思われた。マスコミや官公庁からは取材や視察が殺到し、世間の関心の的となった。ところが、二〇〇三年八月、事実上の経営破綻に追い込まれる。外部からの注目と、その内実に大きな隔たりがあったのだ。

### 地域メディアとしての再生

FMわいわい再建を目指して、運営の基盤となっているボランティアも交じえ、何度も話しあいがもたれ

た。そのなかで、身近にある「声なき声」を伝えてきたかどうかが大きき課題となった。情報弱者となっている当の外国人と地元の声に積極的には耳を傾けず、結局、「コミュニティFM」を支えるはずの地域コミュニティのニーズから離れてしまっていたのだ。

新しいスタートを切ることにした二〇〇四年、「FMわいわい番組放送基準」を作成し、地元に住む外国人やマイノリティが発信主体となる番組、外国語ややさしい日本語による情報提供・人権擁護・多文化を伝えることを目的とした番組については、放送枠を優先的に提供し、草

の根の声を発信することに重点をおいた。また、地域住民を短絡的に「外国人ニューカマー」と「日本人ホスト社会」に切り分けるのではなく、地域社会のなかで多様な人たちがそれぞれが認めあい、助けあい、そして関わりあう、まちづくりの起点としての放送を目標にした。

現在そのような姿勢は、長田区をはじめ阪神間に多い沖繩・奄美出身者を意識して制作されている「南の風」や、アトピー患者と医師が対話して病気への理解を深める「アトピーのリズム」、障がい者の語り場となっている「ふれてあれこれ好奇心アイ・ローアイズ」といった番組

### 世界のコミュニティラジオとの連帯

地道に「草の根メディア」の歩みを進めるようになり、FMわいわいには新たな地平が見えてきた。それが世界に散らばるコミュニティラジオオ局との連携である。二〇〇七年からは北海道ニ風谷にあるアイヌの文化を紹介するミニFM局「FMピバウシ」の番組を生中継しているほか、国際NGO「世界コミュニティラジオ放送連盟」の一つの核として、世界各地の市民参加型のコミュニティラジオ局と歩みをとりにしている。

声なき声に結びつき、しっかりと地域に根をおろすことで、震災時の緊急放送だけでなく、「ふだん着の多文化メディア」という姿を身につけ、その存在意義を確かなものとしようとしている。



FMわいわいスタジオでの収録風景（2009年11月）

FMわいわいで毎月おこなわれる「ラジオワークショップ」の様子（番組「南の風」の回 2009年10月）

現在のFMわいわいスタジオ（カトリックたかとり教会内）



\* インターネットラジオでFMわいわいを聞く方法：  
<http://www.tcc117.org/fmyy/internet/index.html>

### 寺尾智史

神戸大学大学院助教

神戸市生まれ。留學生の研究指導を担当。少数言語の保全運動史について研究。共著に「アクション別フィールドワーク入門」（世界思想社、二〇〇八年）、「芸術は何を超えていくのか？」（東信堂、二〇〇九年）。ポルトガル北東部の少数言語ミランダ語保全を扱ったポルトガル映画「日本からミランダの大地へ」に主演。

# 捕鯨者たちの大宴会 (ゴンドウクジラ)

北緯62度西経7度の北大西洋に浮かぶフェロー諸島は、バイキングの末裔たちが暮らすデンマーク領。サケなど魚介類の多くは日本に輸出される。

じつはこの島、島をあげての鯨漁で知られる。人口約5万のこの小さな島に、世界の捕鯨関係者が集った



日本のクジラ料理の定番、刺身と竜田揚げ



フェロー島とアイスランドのクジラ料理



クジラとブルーベリーの料理



クジラのパイ包み

コペンハーゲンから飛行機でわずか二時間半で、フェロー島ヴォーアル空港に降り立った。フェロー諸島自治政府の首都トースハウンを開催される「世界捕鯨者会議」に出席するカナダや日本を始めとする九カ国からやってきた捕鯨者やその関係者たち総勢五〇人程の一行は空港からバスに乗り、目的地へ向かった。行き着いた先はアイスランドともノルウェーとも異なる雰囲気、清潔に整った町並みであり、あたり一帯に樹木のないならかな丘が広がる景色はこれまで見たことのない不思議な景色であった。

## ゴンドウクジラの追込み漁

フェロー諸島は地図の上ではノルウェーとアイスランドの中間地点にある。アイスランドの友人たちには、「フェロー島民の先祖は、ノル

## 鯨肉がつくる家庭の味

現在、ゴンドウクジラ漁がおこなわれる場所(湾)は二カ所ある。捕獲から分配に至るまで政府が管理し、まさに老若男女を問わず島民たちが一体となって漁をおこなう。沖にクジラの群れが確認されると、サイルンが町中に響き渡り、人びとはそれぞれの役割を果たすべく漁の準備をはじめ。男たちは船に乗り海へ繰り出し、クジラの群れを湾へと追い込む。残る人たちは湾に追い込まれてくるゴンドウクジラを解体する準備に取りかかる。解体されたクジラはそれぞれの部位に分けられ、分配を担当する役人の配給で、それぞれの家庭へ配給される。新鮮な肉は、茹でるか、脂肪とジャガイモを添えたステーキとして食卓に上る。肉と脂肪は冷凍庫に保存するほか、伝統的な塩漬にし



クジラ料理を味わうひとたち



ゴンドウクジラの追込み漁を再現してくれたフェロー漁師と子どもたち

ウェーを船で出発したバイキングたちのうち、途中で船酔いをして船を降りて住み着いた者たちだ」という冗談話を披露して、私たちが笑わせてくれた。世界各地から集まった捕鯨者たちが、それぞれの地域に根付いた捕鯨文化の一端を報告しあう会議の合間に、フェロー島民たちは自分たちの捕鯨文化について熱く語ってくれた。一八の小さな島からなるフェロー諸島はその地理的条件から漁

## 世界各地のクジラ食文化を体感

ゴンドウクジラ漁がすでに終わってしまった秋にやってきた友人たちには、フェロー島民たちは捕鯨を再現し、クジラの解体を見せてくれた。大人たちが解体作業を進めるそばで、大人と同じ服装で現れた子どもたちが小さなナイフを手に、装飾品として用いられるクジラの歯を取り出す作業をする姿は印象的であった。

世界捕鯨者会議の締めくくりは盛大なクジラ料理の饗宴だった。「クジラ汁」「クジラの竜田揚げ」「クジラ刺身」などの定番の日本のクジラ料理に加え、グリーンランド、セントルシア、フェロー諸島、アイスランドのクジラ料理がところ狭しと並べられた。地元の人たちを含めて一〇〇人を超す参加者たちは世界各地に根ざしたクジラ食文化を体感した。大宴会の最後にはフェロー島に古くから伝わるチェンダンズが披露され、そのダンスの列に参加者全員が連なり、延々と長いチェンダンズは終わることなく続いた。その熱気は世界的な反捕鯨のうねりに逆らい、細々としかし赤々と燃え続ける捕鯨の炎のように見えた。

いわさき 岩崎・グッドマン まさみ

北海学園大学教授

一九八〇年代後半からすでに二〇年以上の間、捕鯨問題に係る研究をおこなってきた。フィールドは日本、ノルウェー、アイスランドの捕鯨コミュニティ、さらに国際捕鯨委員会。最近は一先住民族による捕鯨に関心をもっている。



業資源を基盤とした生業を発展させてきた。そのなかでもゴンドウクジラの追込み漁は古い歴史があり、捕獲量やその産物の分配などに関する捕鯨の詳細なデータは、フェロー政府の管理のもと、一五〇〇年代から現在に至るまで厳密に記録され、保存されている。



クジラの解体を再現してくれるフェロー島民



クジラの歯を捕るのは子どもの仕事

## ゴンドウクジラ

Globicephala

ゴンドウクジラ属にはヒレナゴゴンドウとコビレゴンドウがいる。北西大西洋に見られるのはヒレナゴゴンドウで、南北両半球において、気温が穏やかで極に近い水域に広く分布している。ヒレナゴゴンドウは数頭から1,000頭以上までの群れをなして回遊する。雄は体重が1.7トン程度で体長は5.5メートルほどであり、雌は体重が0.9トン程度で体長は4.3メートル程度である。

# 歳時世相篇



季節の移り変わりが比較的はつきりした日本で生まれ育った私にとって、フィジーは季節の変化がずいぶん乏しく思われる。雨季乾季、あるいは「暑い」時期と「暖かい」時期の差こそあれ、いわゆる季節の移ろいという感じはない。ただし、なにかの指標に基づいて時間を区分するという、いわゆる暦に類する時間の観念が、フィジーに存在していないわけではない。

## フィジーの暦

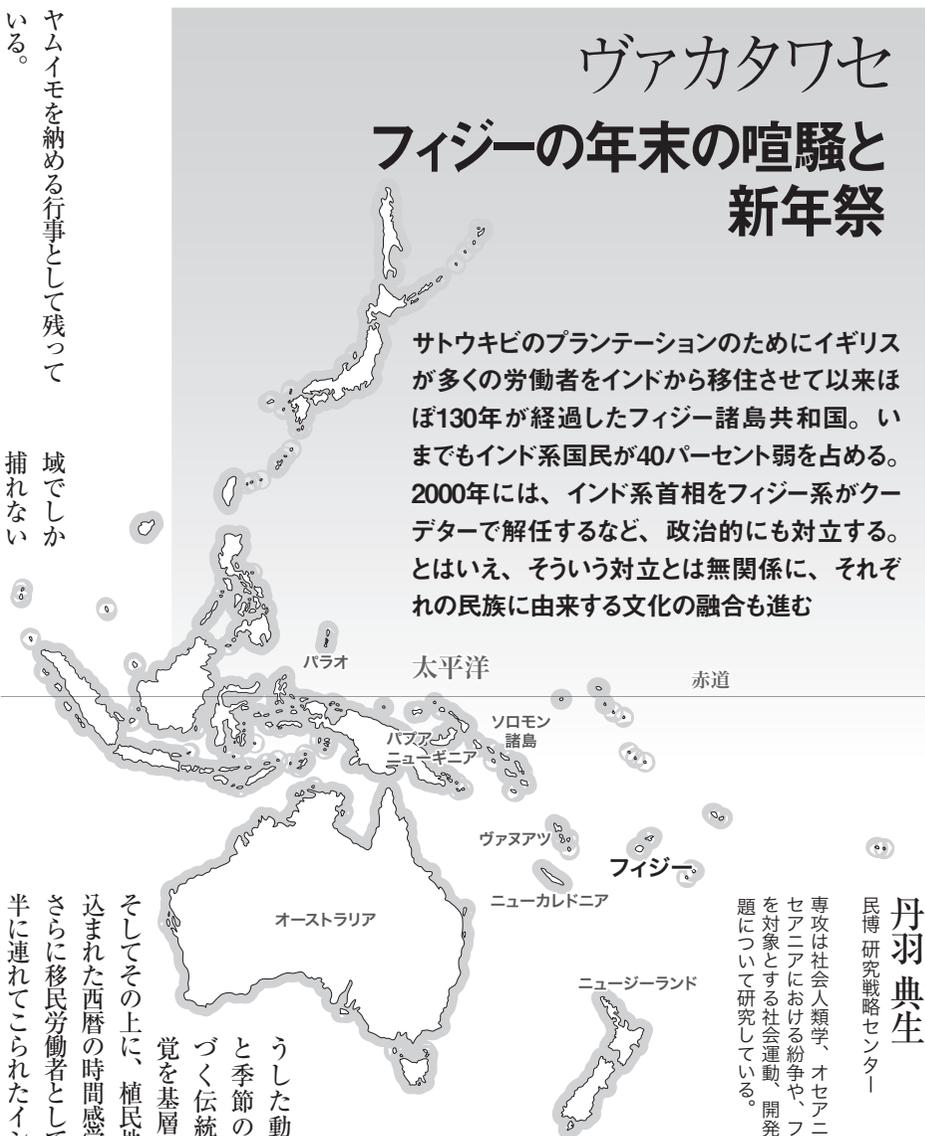
たとえば、オセアニアの諸社会で見受けられるように、ヤムイモの成長は時を表す指標である。ヤムイモの熟す西暦の四月ごろは、特別に「ウヴィの月」（ウヴィはヤムイモの意味）として知られ、キリスト教到来以前は土着の聖職者や首長にヤムイモを献上する儀礼がおこなわれていた。現在でも村の教会に収獲した

季節は年の暮れと年始めにかけてである。一〇月からのデイワリ、一月にはクリスマスなどの行事が目白押しであるし、それに伴うショッピング・セールも盛んである。デイワリとはインド人にとっての大祭である。フィジー人の大多数がキリスト教徒であることもあり、クリスマスは海外移住している家族も集まる好機として多くの人が楽しみにしている。そしてクライマックスとなるのが、フィジー語でヴァカタワセ（直訳すると、なにかを分けるという意味）とよばれる、どんちゃん騒ぎの行事である。一月三二日の深夜を過ぎ一月一日が始まると開催され、子どもであっても夜遅くまで起きていただけでなく、深夜の村の中をぶらぶらとふらつくことが許される。彼らは、日頃からの友人たちとつれだつて大声で叫び声をあげながら村中をどびはね、遊びまわる。もう少し年嵩の男子であれば、女子を連れ出す絶好の機会ともなっている。

ある子はトタンや太鼓をたたいて、わざわざ騒音を起こして騒ぎに加わり、別の子はバケツに水を汲んで待ちかまえて、通りがかりの人にぶっかける。村によっては、大人たちはカヴァとよばれる伝統的飲料を囲む席を設けるのもちろんのこと、ダンスなどの社交の場をつくるなど楽しい行事となっている。

## ヴァカタワセ フィジーの年末の喧騒と新年祭

サトウキビのプランテーションのためにイギリスが多くの労働者をインドから移住させて以来ほぼ130年が経過したフィジー諸島共和国。いまでもインド系国民が40パーセント弱を占める。2000年には、インド系首相をフィジー系がクーデターで解任するなど、政治的にも対立する。とはいえ、そういう対立とは無関係に、それぞれの民族に由来する文化の融合も進む



丹羽典生  
民博 研究戦略センター

専攻は社会人類学、オセアニア地域研究。オセアニアにおける紛争や、フィジーの先住民を対象とする社会運動、開発と伝統文化の問題について研究している。

域でしか捕れない  
珍味である。私自身、年末に離島に滞在して本島に戻ってくるやいなや、その離島でバロロが捕れたとのローカル・ラジオのニュースを聞いて、歯がみをしたおぼえがある。以降、現在に至るもこの南洋の珍味を味わう機会を得ていない。

ヤムイモを納める行事として残っている。  
農耕のサイクルに合わせて季節を区分するやり方のほかにも、西暦の一月あたりを「バロロの月」とよぶように、その時期にとれる魚介類にちなんで命名するならわしもある。バロロとはミミズのような形態をした海の生物で年末の一時期だけ捕獲できる。しかもフィジーの一部の地

うした動植物の成長と季節の移ろいに基づく伝統的な時間感覚を基層としている。

## ヴァカタワセと 年末年始の喧騒

このように多民族のかつ重層的な時間感覚で形成されているフィジーの一年のなかで、もっとも盛り上がる

普段であれば許されないこうした行為に特別な意味が付けられているというよりは、カーニバル研究においてしばしば言及される「日常の秩序の転倒」といった側面に力点があるようである。  
ヴァカタワセがおこなわれる時期は、西暦に基づいているものの、活動自体はキリスト教到来以前から存在していた土着の信仰の体系と結びついていとされる。それを傍証するように、ヴァカタワセが終わる時期はフィジーの各地で異なっている。

## ほかの民族に広がる ヴァカタワセ

ところで、ことに興味深いのは、新年の時期のどんちゃん騒ぎである。たとえば水を掛けあう騒ぎは、近年フィジーで生活しているほかの民族のあいだにも浸透しつつある。先住系フィジー人とのあいだの確執が取り沙汰されるインド人も楽しんで参加するようになった。都市部では、フィジー人のみならず、インド人、ポリネシア系の少数民族であるロトゥマ人、ソロモン諸島民などさまざまな民族が楽しげに水を掛けあっている姿が報道されることは、定例の年中行事ニュースとなっている。独立以降、近代のフィジーの歴史は、民族間、ことに先住系フィジー人と植民地経営のために英国によつ



ヴァカタワセの宴席でカヴァを混ぜる木鉢を囲む人びと

て連れてこられたインド人のあいだの政治的確執で彩られている。一九五〇年代を境に、総人口の半分以上を占めるインド人の存在は、先住系フィジー人の政治的支配を脅かすものと受け取られている。結果として、たびかさなるクーデターをはじめとする政治的問題の遠因のひとつと

なっている。  
こうした民族間関係において不安定さを抱えるフィジーであるが、一〇〇年以上に及び生活をともにすることで培われた歴史的重みは、移民集団の身体にも確実に刻み込まれているといえよう。ヴァカタワセの行事はそのことを例証している。

# 難民キャンプの市場から

紛争の長期化にともなう、  
いつたん生まれた難民状態が解消されることは少ない。  
そうした人びとが暮らす難民キャンプとはなにか、「一律に定義することも難しい。  
そついうキャンプには、それぞれの紛争の内容や地域の特徴、  
難民と地域住民との関係を背景に、「難民文化」とでもいっべきものが誕生している

ないとう なおき  
内藤直樹  
民博 機関研究員  
専門は生態人類学、地域研究。東アフリカ牧畜社会の制度・組織の可変性・流動性、貧困と開発、紛争・難民問題などに関心がある。著書に「遊牧民」（昭和堂、二〇〇三年）などがある。



難民が生活する屋敷

## 世界最大の難民キャンプ

ダダブ難民キャンプは、ケニア共和国・ガリッサ県に位置する世界最大の難民キャンプである。  
一九九二年、ケニアの遊牧民ソマリ族の人びとが暮らす小さな町・ダダブに難民キャンプが建設された。その後キャンプの難民人口は拡大を続け、とくに二〇〇七年の隣国ソマリアでの紛争の激化以降は、ソマリア難民の大量流入による人口過密が深刻化している。二〇〇九年七月の難民キャンプの総人口は、約二九万人であり、そのうちの約九五パーセントがソマリア難民である（UNHCR Sub-Office Dadaab調べ）。これはキャンプが位置するガリッサ県の総人口約二八万に匹敵する。

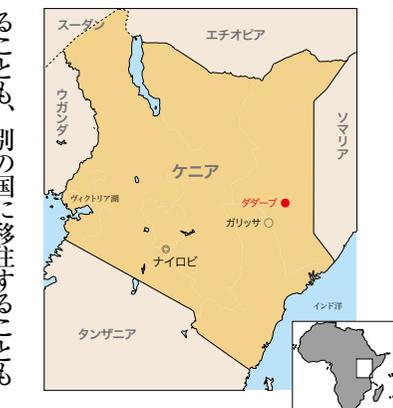
難民キャンプは水源・水道網、小・中学校、診療所・病院、集会所、市場などのインフラ設備を備えている。

。一般的なイメージとは異なり、柵で囲われてはいない。しかしながらケニア政府は、難民のケニア国内の自由な移動を禁止している。キャンプの内と外は「見えない柵」で隔てられている。もつとも早く来た人びとは、もう一七年間もの長きにわたって「柵」のなかで暮らしている。

## アフリカ難民問題の課題

アフリカ難民問題の課題は、人びとが難民として暮らす状態が長期におよぶ状況にどのように対処すればよいか、明確な答えが出ていない点にある。アフリカの紛争の多くが長期化し、多数の難民を生み出している。だが難民が逃げこむ隣接国は、多数の難民の受け入れには消極的である。

アメリカやカナダなどの先進国が難民を受け入れてくれているが、その数はあまりに少ない。難民たちは帰国す



ることも、別の国に移住することもできないままに、先の見えない暮らしを続けている。しかも、これまで「難民」とは一時的な状態」として考えられてきたため、「長期的な視野に立った開発」の対象になることはなかった。

しかしながら近年、難民と難民を受け入れる地域社会の双方を支援の対象とする「難民の地域統合」という考え方が注目されている。だが、それを実現するために、具体的にどのような開発援助が必要とされるの

かについては、いまだ試行錯誤が続いている。このようなアフリカ難民をめぐる諸問題を解決するには、「難民」として長期間生きる経験」がどのようなものか、その生活の現場から理解することが必要である。

## 難民キャンプでの暮らし

ダダブ難民キャンプの人びとは、どのような暮らしをしてきたのだろうか？一九九二年からの一七年の間に創られた「難民文化」がいかなるものか理解するために、わたしは二〇〇九年八月にダダブでの最初のフィールドワークを開始した。

キャンプで知り合いになった青年・モハメドが暮らす居住区を訪ねてみると、意外なほど掃き清められた中庭を中心に母屋、台所小屋とはなれが囲む屋敷で、彼の家族が迎えてくれた。

このときはラマダン（イスラム教



フェデレーション(federation)という料理

難民がつくる新たな暮らしとネットワーク  
モハメドの母親は市場で商店を営んでいる。市場で食材を買っているのはおもに難民の女性である。彼女はガリッサで野菜を商うケニア人に携帯電話で連絡して、野菜を送ってもらっている。またバスタや香料といった商品の一部は、深夜ひそかにソマリアからやってくる。彼女



ハガデラ市場のメインストリート

たちはケニアやソマリアの人びとのつながりを利用して得た商品を購入することで現金を得ていた。

一方、男性たちの多くは、手製の三輪車やロバ車による荷運びなどの肉體労働で現金を得ていた。では売るモノがない人びとは、どうしているのだろうか？ある日モハメドは、私を食糧配給所の前に連れていき、その前に立ち並ぶ臨時の露店を見て言った。「あれは『配給買い取り屋』さ」。買い取られた配給食は、ケニア人に安価で転売される。

難民キャンプは「見えない柵」で隔てられている。しかし人びとの暮らしは、柵の隙間をぬって張り巡ら



野菜と雑貨を売る女性(ダガハレイ市場)



携帯は難民生活の必需品(充電屋にて)

された難民とケニアの地域住民、ソマリアに残る人びとたちからなるネットワークによって成立していることがわかる。それは決してポジティブな面だけではない。配給食すら販売しなければならぬ人びとがいることも事実である。  
一部では難民とケニアの地域住民との間に土地利用をめぐる紛争も発生しているとも聞く。生活を再構築する必要があるので、難民だけではない。県の総人口に匹敵する数の難民を受け入れざるをえない状況に陥ったケニアの地域住民も同様である。  
とはいえ、難民とケニアの地域住民は新たなつながりを創り出し、生活を再構築しようとしている。今後は、このような難民と地域社会の人びと双方による生活の再構築にむけた試みや創意工夫を見つ、「難民の地域統合」の可能性を検討したいと考えている。

## 編集後記

4、5年前から始まり、もう恒例になっているようだが、『月刊みんぱく』2010年1月号は干支にちなんでトラ特集号である。トラといえば、民博のある関西には、トラをシンボルとする野球チーム阪神タイガースがあり、館員にもことのほか阪神に思い入れの強い人がおおい。2003年、阪神が18年ぶりにリーグ優勝した時は大騒ぎで、その際有志が買ったいくつものスポーツ紙がいまだに休憩室のマガジンラックに色あせたままおかれているほどだ。

ところでトラは、ヨーロッパや中近東のライオンに対し、アジアでは信仰や寓話にはよく登場する。その影響か、トラのいない日本でも、古くから玩具や絵画のモチーフとして親しまれてきた。民博では、年明けに干支にちなんだ展示イベントが企画されているが、今年は例年以上に盛り上がりそうである。民博には他球団ファンとともに、私のようにタイガースはおろか、野球自体にも関心の薄い館員も少数ながらいて、普段は息をひそめているが、イベントにはそれを跳ね返す意気込みで全館あげて取り組んでいる。乞うご期待。(庄司博史)

### 次号の予告

## 特集 総研大20周年記念座談会

## 月刊みんぱく 2010年1月号

第34巻第1号通巻第388号 2010年1月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 西尾哲夫  
編集委員 久保正敏(編集長) 佐々木史郎 庄司博史  
中牧弘允 信田敏宏 山中由里子  
協力 財団法人 千里文化財団  
制作 京都通信社  
印刷 市蔵図書

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係にお願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

## みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

- 予定時間 14時30分から15時30分(予定)。
- 常設展示場観覧料が必要です。
- \*都合により、予定を変更することもあります。

国立民族学博物館(みんぱく)の研究者が、来館された皆様の前に登場します!

「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別! どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしています。

### 1月の開催

1月10日(日)

話者: 内藤直樹(研究戦略センター機関研究員)

話題: 難民キャンプでみる長い夢:  
アフリカ難民の暮らしと文化

場所: 展示場内休憩所



別の難民キャンプに移動するソマリア難民

1月17日(日)

話者: 杉村棟(本館名誉教授)

話題: 遊牧民・村人の絨毯と都市の絨毯——技法とデザイン

場所: 西アジア展示

1月24日(日)

話者: 平井京之介(民族文化研究部准教授)

話題: 地域をつくる博物館——タイと水俣の事例から

場所: 展示場内休憩所

1月31日(日)

話者: 佐藤浩司(民族社会研究部准教授)

話題: 建築空間をいかにして伝える?

場所: 展示場内休憩所

## 1年間みんぱくに何度でも入館できる

「みんぱくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

常設展は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいあります。

- ◆特典◆常設展の無料入館◆特別展の観覧料割引
- ◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
- ◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
(電話06-6877-8893 / 平日9:00~17:00)



### 交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分(茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れられます。

●みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

